

## 「シリーズ 認知と言語」刊行のことば

認知言語学は、言語の認知科学として生成文法と目標を共有しつつも、言語に固有の生得的知識を前提としない帰納的な言語観を提唱し、言語を所与の安定した記号系ではなく、人間の身体と環境の相互作用、さらに他者との社会的相互行為によって絶え間なく創発するシステムとしてみる言語研究のプログラムである。

認知言語学の草創期には、ラネカーとタルミーを中心に文法と意味の認知基盤を問い直す研究がスタートした。また、認知意味論の分野では、レイコフとジョンソンによる概念メタファーの研究、フィルモアのフレーム意味論と構文文法、フォコニエのメンタルスペース理論、概念融合理論など、新たな言語理論が次々に提唱されていった。

次に、ミレニアムを迎える頃になると、認知言語学も通常科学として定着し、量的な実証研究が進められるようになる。この時期には、大規模データを駆使したコーパス研究、実験的手法に基づく心理学的研究、外国語教育への応用研究など、使用基盤モデルに基づく文法研究が推進されるとともに、関連分野との接点が追求されるようになった。

そして現在の第三期認知言語学では、認知科学がこれまで暗黙の前提としてきた西洋の合理主義を脱却する新たな人間像に基づく研究が模索されている。本シリーズでは、こうした新たな言語の認知科学を切り拓く可能性に満ちた研究をとりあげる。第1期のシリーズでは、次のような方向性を持つ研究をモノグラフとして刊行する。

- 生態心理学の知覚・行為観に基づくエコロジカルな言語研究
- ことばの感性的側面に着目するマルチモーダルな言語研究
- インタラクションを重視する言語コミュニケーション研究

まず、エコロジカルな言語研究として、生態心理学に基づく言語研究があげられる。生態心理学は、私たちが具体的な活動を通して環境と切り結び、

そこからどのような情報を抽出し、利用するかを解明していく。こうした発想に基づき、本シリーズでは、言語とコミュニケーションをささえる環境を重視した生態学的な言語研究をとりあげる。

次に、認知言語学の研究領域の拡がりとして、オノマトペ、プロソディー、ジェスチャー、広告表現、マンガ表現など、従来までは言語研究の埒外に置かれていた現象が注目されるようになり、こうした言語を取り巻く領域の研究が精力的に進められている。本シリーズでは、こうした言語のマルチモダリティに着目する研究をとりあげていく。

最後に、言語を他者との相互行為によって創発するものとみなす研究も広く行なわれるようになってきている。こうした言語観は、談話機能論、会話分析、相互行為言語学などに端を発するものであるが、本シリーズでは、こうした他分野との接点を背景に、言語コミュニケーションをインタラクティブな観点から考察する研究をとりあげる。

本シリーズは、以上のような潮流を背景に、認知言語学に新たな領域を切り拓く可能性に満ちた研究をモノグラフとして刊行し、ひいては言語の認知科学にブレイクスルーをもたらすことを企図するものである。なお、本シリーズは第1期として刊行される。新たな執筆陣を得て、第2期、第3期へと継承されることを期待したい。

シリーズ編者 仲本康一郎  
本多啓